

会員自ら運営する演劇鑑賞団体

札幌市 NPO法人演劇鑑賞会北座

東京の劇団による一般公演が少なかった札幌の人々が、優れた演劇を鑑賞する機会をもとめ、特定非営利活動法人演劇鑑賞会北座(以下札幌えんかん)は、1971年(昭和46年)2月に産声をあげた。

札幌えんかんは、月々の会費だけで年6本の芝居が楽しめる会員制の団体で、バラエティーに富んだ作品を400本以上招聘している。また、これまで札幌の劇団を集めた「札幌演劇祭」を主宰したり、若手劇団を観劇会にとりあげたりするなど、札幌の演劇文化の発展に貢献してきた。

創立時の名前は勤労者演劇協議会(労演)。その後77年に札幌演劇鑑賞会に名称変更し、2002年(平成14年)1月に特定非営利活動法人(NPO法人)となり、現在の団体名になった。

会員は会費、入会金を支払えば誰でも入会することができる。サークル(3人以上のグループ)を単位とした会員制のため、原則は3人以上のサークルを作って入会するか、知り合いのサークルに入る必要はあるが、3人に満たない場合は、事務局がサークルを紹介して所属し

てもらうため、1人でも入会は可能だ。

現在、サークル数は270ほど。多いところでは20人ほどが所属する。サークルには番号と共に、「お達者倶楽部」や「しろとかい」などの名前もつける。会員は9割が女性で、平均年齢は60歳ほど。札幌在住者が多いが、室蘭、余市、恵庭など道内各地に会員がいる。中には会の応援の意味も込めて東京の演劇関係者も入会している。

観劇会当日は、チケットがわりの「座席シール」を貼った会員手帳で入場する。当日は、「en(えん)」という会報誌も配布される。シールの申し込みや受け取りはサークルの代表者がまとめて行う。

■ 「全サークル会議」で 観劇会候補作品を選ぶ

札幌えんかんは芝居を観るだけでなく観劇会の準備や会場運営、作品選びなど、観るだけでなく参加する楽しみがあるのも特徴。

運営は全サークルが対象で、サークル単位で参加するため、実際に担当するのは年1回程度。運営を担当するサークル

を「運営サークル」といい、観劇会の準備や会の宣伝、当日の会場運営などを行う。



会員が運営するのも札幌えんかんの特徴

観劇会の準備としては、シール作りや会員への座席割りをを行い、ポスター貼りや、チラシ配りなど会の宣伝も行っている。観劇会当日になると、もぎりや場内整理、開演前のアナウンス、搬入・搬出など会場運営にかかわることは、全て運営サークルの会員が行う。また、役者やスタッフに、「差し入れ」として手作りの家庭料理を振る舞うこともある。こうした差し入れや搬入・搬出、出演者との交流会などで、役者やスタッフと交流がもてるのも会の特徴だ。

こうした演劇関係者との交流や観劇会を通して、舞台制作に関する仕事について、俳優になって凱旋公演をしたりす

る会員など、入会したことで夢を叶えた会員もいる。

札幌えんかんでは、会員全員が対象の「全サークル会議」が数回にわけて行われ、会の現状やこれからの発展、今後の観劇会の候補作品について話し合われる。2016年は10月に11回行われ、195サークル、350人が参加した。テーブルごとに話し合い、2～3年後に札幌公演が実現できそうな14作品の中から候補作品を5本選択。候補作品や会員の観劇後のアンケート調査などで、観劇会の上演作品は決定される。

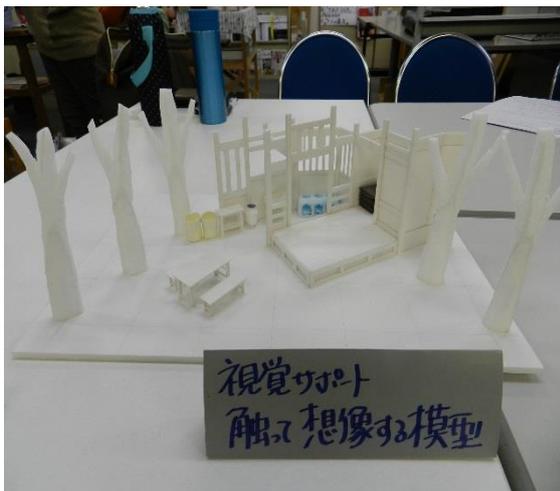
■ 全国でも珍しい

視覚障がい者への取り組み

会員やその友人、知人を対象に各劇団の演出家や出演者を招いたトークショー「えんかんサロン」や、中学生や高校生に優れた演劇を見てもらう機会を提供するユースシアター事業など様々な事業も行っている。中でも現在、特に力を入れているのが視覚障がい者への観劇サポート。芝居をより楽しめるよう作成した舞台セットの模型を、観劇前に触って舞台の様子を確認してもらうという、全国の演劇鑑賞団体の中でも珍しい取り組みをしている。また、視覚障がい者を座席へ

案内したり、緊急時に備えて隣の席と一緒に観劇したりするサポートや、聞こえ方に不安がある会員のために、セリフが聞き取りやすくなるよう、イヤホンによってFM波で送信される舞台の音を聞く、「聞こえのサポート」も行っている。

こうした事業や作業を円滑に行うため、運営サークルだけではなく、様々な「グループ」が活動し、運営を支えている。例えば、事務局をサポートする事務局補助や、会報誌を作成する編集部、前述した舞台セットの模型を作成したり、イヤホンガイドを準備したりする視聴覚グループなどだ。



会員によって作られた舞台セットの模型

■ 「若い世代の会員を増やしたい」

現在、理事は11人で、鶴間真美子さんが事務局を務める。鶴間さんはお芝居に全く興味がなかったが、職場の先輩に誘われ、入会したのをきっかけに芝居を観に行くようになった。鶴間さんにはそれほど響かなかった芝居でも『今まで見た芝居の中で一番面白い』という他の会員たちの反応に衝撃を受け、今では芝居の魅力にすっかりはまってしまった。年間の観劇本数は80本ほどにもなる。

今後、鶴間さんは観劇会の作品を、劇場を変えて上演してみたいという。

会員数は90年代のバブル期には5000人いたが、それをピークに今では1300人ほどになった。会員を増やすための広報活動は会員が口コミで誘うことがメインだが、活動内容をパネル展示する札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）でのイベントも実施している。

こうしたイベントや前述したユースシアター事業、観劇会の際、託児（1ステージ500円）も行っており、これらの取り組みを通じて「若い母親世代や学生の方たちにも会員になってもらい、会員を増やしたいですね」と鶴間さん。現在、運営費は会費のみで、その範囲で賄

える運営を行っているが、会員が増えることによってできることも多くなる。

「例えばステージ数を増やすことができ、それによって劇団も札幌に来やすくなります。ステージ数が多いと上映日変更もやりやすくなって会員もより観劇しやすくなりますから」

する会」。そんな会だからこそ45年間も続いてきたのだろう。もう少しで50周年、これもひとつの通過点にしか過ぎない。世代を超えて愛されている組織ゆえだろう。



事務所に集まり、シール作りなど観劇会の準備を行う

最近、チ・カ・ホでの広報活動が功を奏したことや、子育てが終わったことで再入会する会員も増えているといい、会員みんなで取り組んでいる「仲間づくり」の成果が徐々に現われているようだ。

最後に45年も長く会を継続できた秘訣を鶴間さんに尋ねると「理事だけでなく会員みんなで会を引っ張っているから」という答えが返ってきた。「会員みんなで運営

■ 連絡先

〒060-0001
札幌市中央区北1条西3丁目
Ree PROビル2階
NPO法人演劇鑑賞会北座
理事長 河田 俊彦(かわた としひこ)
事務局 鶴間 真美子(つるま まみこ)

TEL : 011-241-7081
Email : kitaza.info@mbn.nifty.com
URL : <http://enkan.life.coocan.jp>